超電磁マシーン ボルテスV

1977年

『超電磁マシーン ボルテスV』（ちょうでんじマシーン ボルテスファイブ）は、1977年6月4日から1978年3月25日まで、テレビ朝日系列で毎週土曜18:00 - 18:30（JST）に全40話が放送された、東映テレビ事業部・東映エージエンシー制作のロボットアニメ。

【概要】
前番組『超電磁ロボ コン・バトラーV』に引き続き、本作品でも東映テレビ事業部が企画し、制作を日本サンライズに委託するという制作体制が採られている。メインスポンサーとしてポピー（現・バンダイ）が参加しているのも前番組と同様である。本作品は、『コン・バトラーV』に端を発する「長浜ロマンロボット3部作」の第2作に数えられている。題名の“V”は、前作『コン・バトラーV』の“V”は英字で“ブイ”と読ませるのに対し、本作品ではローマ数字のVで“ファイブ”と読む。オープニングに登場する番組ロゴと、アイキャッチに登場する番組ロゴは異なり、アイキャッチ版はポピーの玩具に用いられることが多い。監督の長浜忠夫の構想メモおよび第1話準備稿の表紙から、それぞれ『グランバッファーA（エース）』『超電磁ロボ・V・クリーガー』という準備タイトルが確認できる。当初、NETがテレビ朝日へと局名を変更する1977年4月の放送開始を前提に、本作品の企画は進行していたと見られている。提供スポンサーを務めていたポピー（現・バンダイ）からの提案によって、本作品の必殺技は銃であることが日本サンライズのスタッフにも伝達されており、1976年末には本作品の作画も開始されていた。ところが12月29日朝に、ポピーが必殺技を剣にするという重大な変更事項を唐突に通達したことから、その時点までに作られていた作画はもちろん基本設定まで白紙撤回も同然に戻されてしまう。必殺技はポピーによって「天空剣」と命名され、本作品でも総監督を務めることになった長浜忠夫は、作画スタッフや脚本家などへの参考資料として、殺陣師による天空剣の振り付けを、改めて撮影することになった。ストーリー展開においても長浜は、1話完結方式が基本だった前作との違いを強調するために、本作品では父と子の大河ドラマを提案した。この提案を長浜と協議した田口章一によると、これは『母をたずねて三千里』（1976年）の影響で、「母ならぬ父をたずねて」とのことである。それに対し、東映テレビ事業部の部長を務めていた渡邊亮徳は、単なる「お涙頂戴」ものの展開になることを避けるためにも、本作品ならではの切り札を要求した。渡邊の要求に応じるべく、長浜は宝塚歌劇団をヒントに「プリンス・ハイネル」という主人公のライバル格の主要キャラクターを考案した。また、東映のプロデューサーだった飯島敬によると、主人公らと異母兄弟であるハイネルに対して、最終回で悲劇的な最期を遂げさせることは当初から決定済みだったという。これは「身近にある様々な差別に対する怒りを強烈に引き出し、本作品を通じて差別を憎みそれを是正するのを視聴者に考えて欲しかったからだ」と語っている。そのような紆余曲折を経て、第1話の決定稿が完成したのは1977年3月であり、放送は6月4日という中途半端な時期に開始される運びとなった。長浜によると、本作品はその高いドラマ性により『コン・バトラーV』の視聴層である幼児から小学生のみならず中高生、大人が見ても鑑賞に耐えうる作品を目指したそうである。このような手法は現在では、低年齢層からの反響が悪くなり、低年齢向けロボットアニメのマーチャンダイジングという観点からはマイナスに働く選択であることがわかっているが、田口章一によると1970年代のロボットアニメでは「スポンサーサイドも絶対的な勝算を持っていなかった」ため、特に反対はされなかったそうである。商業的に見ると本作品は、前作『超電磁ロボ コン・バトラーV』には及ばなかった。ポピーによると「超合金そのものは少しも落ちていません。個数的にも、ボルテスVは一昨年のコンバトラーVと同じです。では何がダメだったのか言うと、ポピニカ関係が非常に伸び悩んだわけです」としている。「ポピーのミニカー」で乗り物関係のブランドである"ポピニカ"ブランドとして、本作品ではボルトマシンやビッグファルコンが“発売された。ボルトマシンは5機個別に発売され、これを全て揃えることで合体し、ボルテスVが完成するというもの で、トータルを考えれば単価が高く、事実上は超合金より上位に位置する商品だった。本作品のポピニカ玩具の不振の主要因は、同時期にスーパーカーが子供たちの間で大ブームとなり、注目がそちらに流れたことだったとされる。本作品の売りであるボルテスの合体機能は、商品上だと超合金ではロボット形態のみで装備されておらず、ポピニカにのみ装備されている。そのポピニカが全く不振に終わったことはすなわち、本作品の主要セールスポイントである合体が売れなかったということを意味する。このため次回作『闘将ダイモス』では超合金のラインナップが増やされる一方でポピニカは減らされ、合体も売りにしなくなった。本作品の放送中にスタッフも変動しており、各話演出のとみの喜幸や作画の貞光紳也、富沢和雄は『無敵超人ザンボット3』の参加に専念するため中盤で降板した。一方で同じく作画の佐々門信芳は、本作品の制作が終わった後に『ザンボット3』の最終回に参加している。番組終了から数年が経過した1980年代に映画化が報じられたものの、最終的にこれは頓挫している。
出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

【ボルテスV】
ボアザン星人の地球侵略とその尖兵である巨大戦闘メカ・獣士に対抗するため、剛健太郎博士が開発（妻の剛光代と浜口博士も開発に協力）した巨大スーパーロボット。「ブイ・トゥギャザー！」の掛け声でボルトマシンがV字編隊を組み「レッツ・ボルトイン！」の掛け声と共に5人が一斉に赤いボタンを押すことで合体。合体解除はボルトアウトと呼称される。ボルトクルーザー（VoltCruiser:クルーザーは巡洋艦の意味）、ボルトボンバー（VoltBomber:ボンバーは爆撃機の意味）、ボルトパンザー（VoltPanzer:パンザーは戦車あるいは装甲車の意味、ドイツ語読みの「パンツァー」の方が日本では馴染み深い）、ボルトフリゲート（VoltFrigate:フリゲートは日本語ではカタカナ表記されることが多い、中小型の水上戦闘艦）、ボルトランダー（VoltLander:ランダーは地上車の意味）の5機が合体することにより、全長58.0m、重量600.0t、最高飛行速度マッハ20の人型の巨大ロボットとなる。動力源は超電磁エネルギー。メインパイロットは剛博士の長男、剛健一。前作がアニメの合体を玩具で表現する際に非常に苦労した ことから、デザインは玩具メーカー主導で進められ、コン・バトラーと比べても、俗に「烏天狗」と評される顔のデザインを除けば、合体システム、機体の配色、各機体の役割なども同じであった。ロボットアニメにおける決めの必殺技として剣で斬るパターンを創出したのが、ボルテスVの天空剣Vの字斬りである。剣そのものは西洋式の両刃の剣であったものの、その巨大さゆえに両手で振るわれることから事実上、剣道のような殺陣が描かれることとなり、その後しばらくの間、スーパーロボットの必殺技といえば「○○剣xx斬り」がお約束となるほどの影響を残した。加えて、アニメ・特撮のスーパーロボットは剣と共に盾も装備するのが後々に定番となるが、本作品において聖悠紀が描いたボルテスVの活躍イメージイラストには、作中に反映こそされていないものの、時代を先駆けて天空剣と共に盾 を保持している画稿も存在している。また、ボルテスVではロボットの設定や演出に工夫が凝らされている。第1話では声紋登録が行なわれており、ボルテスチーム以外の人間では合体できないとされた。また、3機のコクピットが装甲に隠れるのでパイロットの安全性は高い反面非常時の脱出が困難とされる。第10話では超電磁エネルギーの秘密が敵に解析され、超電磁合体破壊装置を装備した獣士が登場して合体不能の危機に陥るが、浜口博士開発のウルトラマグコンを追加装備し、事なきを得る（この際に、超電磁エネルギーはクラウンコイルへの磁粒子の誘導により発生する、と設定されている）。第16話では損傷したボルトフリゲートを分離し、クルーザー、ボンバー、パンザーだけの上半身とランダーとで戦うという離れ業も披露している。天空剣の刀身が巨大な獣士を切り裂くことができるのはなぜか、とボアザン側が研究した結果、刀身の強度だけではなく刀身を包む超電磁フィールドが分子構造を分解していることが判明すると、マキシンガル合金装備の鎧獣士が登場、天空剣が全く通用しなくなる事態に陥る。この事態を打開するため、剛健太郎（当時は行方不明中）が送り届けた鷹型メカが、マキシンガル合金を劣化させる超電磁加重砲をもたらし、ボルテスの後期の必殺技、天空剣・超電磁ボールVの字斬りが完成する。ただし、超電磁ボール自体はマキシンガル合金を劣化させるものでしかなく、あくまでも天空剣による斬撃とVの字斬りを必殺技として使うことは続けられた。

http://moto-material.lsv.jp/

2023.04.02

【ストーリー】
地球より14000光年、蠍座の球状星団内にある恒星系。そこに貴族による寡占政治を行い、角の有無が身分を運命付けるボアザン星がある。ボアザン帝国の科学長官ラ・ゴールは皇帝の甥（弟の長子）として次期皇位継承の資格を持ちながら、角が生まれつきなかったのをライバルのズ・ザンバジルに暴かれて失脚、妻ロザリアとも引き裂かれて労奴に落とされる。しかし、ラ・ゴールは反乱を起こしてボアザンから脱出し、1年の漂流の後、地球に落ち延びて科学者・剛光代に救われる。ラ・ゴールは光代と結婚して剛健太郎と名乗り、物語の主人公となる三兄弟をもうけ、好戦的なズ・ザンバジルの侵略を予想して、浜口博士や防衛軍の岡長官と共に巨大ロボ・ボルテスVや基地ビッグファルコンの建設に着手。後にザンバジルからの召集を受けボアザン星へと帰還するが、断固として協力を拒んだため帝国軍に囚われてしまう。一方、ボアザン帝国ではズ・ザンバジルが皇位を継承する。国内の不満の捌け口を外へ向けるべく「高貴なボアザン文明を宇宙へ広げる」文化輸出の美名を建前に宇宙各地へ侵略を開始した。皇子ハイネルは、“裏切り者の子”と後ろ指を指されるが、皇帝への忠誠を証明すべく、新たな侵略予定地の地球攻撃司令官として任地へ赴くこととなる。かくて地球とボアザン、ボルテスとボアザン獣士、そしてハイネルと剛三兄弟の壮絶な死闘が繰り広げられる。そうした中、ダンゲ将軍に助けられた剛健太郎と反乱軍も地球に到着。ボルテスチームや地球とは別口で皇帝打倒と革命の準備が着々と進められていたが、反乱軍秘密基地はグルル将軍の奇襲を受け、剛健太郎は再び捕らえられてボアザン星へと連れ去られてしまう。だが、反乱軍はビッグファルコンに恒星間航行能力を与えるソーラーバードを完成していた。剛健太郎奪還とボアザン星の解放を目指し、ボルテスチームは巨大宇宙船ソーラーファルコンでボアザン星へ向かい、決戦に挑む。

【ボルテスチーム】
ボアザン星からの侵略に備え、防衛軍内の訓練所で1年もの間過酷な訓練を積んだチーム。

【剛 健一（ごう けんいち）】声 - 白石ゆきなが（現：白石幸長）
チームリーダー。ボルテスV及びボルトマシーン1号機メカ「ボルトクルーザー」のメインパイロット。正義感にあふれる熱血漢だが、優等生タイプの生真面目な性格。剛三兄弟の長男であり、バイクにも乗っているが『コン・バトラーV』の葵豹馬のような不良っぽさ、破天荒さはない。悪く言えば融通が利かない頑固者でもあり、特に末弟の日吉には断固として厳しい態度をとり、他のメンバーの反感を招いてしまうこともある。戦いの最中ボアザン星人と地球人の混血であることが判明し、一時期ビッグファルコンの所員にすら彼らを敵視する者が出た。そのため深い苦悩を覚えるが、戦闘で傷ついた敵のボアザン星人たちの命も救おうとする優しさを持っている。基本的に真面目だが、めぐみの弱点である蟹を用意してからかおうとするなど、茶目っ気のある一面もある。設定年齢は15歳だが、企画段階から設定が数回変わったため年齢より大人びた印象を与えている。射撃の達人だが、肝心のボルテスがスポンサーの要望によって剣がメインのロボットに当初の設定から変更されてしまったことで、後から弟の大次郎に剣術の特訓を受けるという展開も生まれている。

【峰 一平（みね いっぺい）】声 - 曽我部和行（後：曽我部和恭）
ボルトマシーン2号機メカ「ボルトボンバー」のメインパイロット。全米ロデオ大会で優勝した直後にボルテスチームにスカウトされた。キャラクター原案が聖悠紀ということもあり、前作のバトルチームの浪花十三よりも美形に描かれている。めぐみに気があるらしく、第31話ではちょっかいを出している。気障な皮肉屋で、斜めに構えた言動をぶつけてはたびたび健一たちと衝突するが、戦っていく中で友情を深めていき、チームワークの大切さを第一に考えるようになる、最も成長した人物。家族でアメリカに渡ったが開拓に失敗、放浪中に
父が病気になり母も失踪、後に父が病死したため、母親を恨んでいた。そのため、家族の絆の強い剛三兄弟を疎ましく思ったこともある。後に、母が病気の父と自分を狼の群れから守るため自爆したことを知り、わだかまりは解ける。ロデオ大会では3年連続優勝の実力を持つ乗馬の達人で、馬のアイフルをこよなく愛している。鞭の名手で、設定年齢15歳[注 4]。科学技術には疎いようで、ワープ理論をめぐみに教えてもらったりしている。亡母は浜口博士の娘であるため、一平は浜口博士の孫にあたる。

【剛 大次郎（ごう だいじろう）】声 - 玄田哲章
巨漢の剛三兄弟の次男。ボルトマシーン3号機メカ「ボルトパンザー」のメインパイロット。格闘技全般をこなし、棒術には特に優れている。胡蝶返し（真剣白羽取りから投げに転ずる、という複雑な技）を健一に教えたこともある。剛毅で義理を重んじる男らしい性格であるが、父恋しさの余り敵の罠に嵌ってしまうなど情に脆い面も見られる。同じ母親から生まれた三兄弟で一緒に育っているが、西郷隆盛に憧れる余り鹿児島弁しか使わないという、兄弟一の変わり者。健一を呼ぶ際に「兄さん」「おにっさん」「あんさん」等と安定しない。

【剛 日吉（ごう ひよし）】声 - 小原乃梨子
小兵の剛三兄弟の三男。ボルトマシーン4号機メカ「ボルトフリゲート」のメインパイロット。設定年齢8歳らしく、臆病で泣き虫。両親が科学者であるという設定が最も反映されたキャラクターで、機械いじりが趣味。第5話では模型船を作っていたが、第7話ではタコを模した万能サポートロボット「タッコちゃん」も製作する。水泳が得意で、水中活動はお手の物であるらしい。水兵服を好んで着用している。
出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

【岡 めぐみ（おか めぐみ）】声 - 上田みゆき
甲賀流十八代目の忍者であり、岡防衛長官の娘。ボルトマシーン5号機メカ「ボルトランダー」のメインパイロット。長官をお父様と呼ぶお嬢様系のキャラであり、少しカールした長めのポニーテールはゴージャスな雰囲気をかもし出している。しかし、前作のヒロイン南原ちずるが持っていたアイドル的な性格は薄く、チームの中のお姉さん的な性格が強い。ユニフォームはミニスカートのワンピース（形がコンバトラー隊の物に近く、パンチラが何回かあった）スカートの裾近くまで丈のあるオーバーニーブーツを履いている。設定年齢は13歳。未放映シナリオでは橘ユカというライバルキャラが、岡長官の死後に甲賀流十八代目の座をめぐみと争うエピソードが存在した。

http://moto-material.lsv.jp/

超電磁マシーン ボルテスV

超電磁マシーン ボルテスV

【ボアザン星間帝国】

【プリンス・ハイネル】声 - 市川治

ボアザン帝国の皇子。敬称は「殿下」。長浜忠夫によると、宝塚歌劇をヒントにした「女のように薫り立つような趣きを漂わせながらも、きりりとした顔つきの美少年」。二本角のモチーフは孤高の聖獣であるユニコーンであり、角ある者は貴族であるというボアザンの格式に則った貴族の誇りを持つ人物。ラ・ゴールが労奴に落とされた後に生まれ、母の早世後は母方の祖父母に育てられたため、自身は父を知らず、ラ・ゴールも息子の存在を知らない。皇帝ザンバジルは妾腹である自分の地位が正統な血筋のハイネルに脅かされることを恐れ、ボアザン帝国地球征服軍司令官という、ボアザンにしてみれば辺境の危険な任務につかせてしまう。幼い頃から「謀叛人の子」としてことあるごとに迫害を受けていたハイネルは、ザンバジルの企みを知らず、この戦いによって自身のボアザン帝国への忠誠心を証明しようとこの任務を意気揚々と受け、地球にやってくる。しかしボルテスの反撃に苦戦、その失敗を理由に皇帝派のド・ズールやド・ベルガンからもその地位や命までも脅かされる。角の無い地球人を下等扱いしているため、地球人には愛が存在することを簡単には信じなかった。物語終盤でベルガンが伝えた皇帝の勅命により、司令官を解任され地球に1人取り残されるが、ジャンギャルの犠牲とカザリーンの手引きによってボアザン星に帰還。全てを諦めて2人で生きていこうというカザリーンの言葉を退け、貴族としての責務を果たすために王城「黄金城」へと向かう。しかし、王城は反乱軍の襲撃による混乱のさなかにあった。逃げ出す貴族たちを叱責したハイネルは、混乱した貴族に撃たれるが、カザリーンの犠牲により命を救われる。ハイネルは貴族として死してもボアザン星を守ろうと心に決め、ボアザンの古い言い伝えにある守護神ゴードルの炎に身を投じ、ゴードルを駆ってボルテスと一騎討ちをする。ゴードルとボルテスは相討ちで倒れ、ハイネルは生身で健一と戦い続けるが、父の形見の短剣から、共にラ・ゴールの息子であり、剛三兄弟の異母兄であることが判明する。父と弟を敵として戦い続けてきたと知ったハイネルは、愕然として「何たる運命の悪戯だ、兄弟同士が血で血を洗う戦いをして来たというのか」と呟く。その後、権力を失って錯乱するザンバジルを形見の短剣で誅殺するが、ザンバジルが手にしていた爆弾が爆発。ハイネルはとっさに爆風から健一を庇うが、黄金城の崩壊に巻き込まれ、最期は涙ながらにラ・ゴールを「お父さん…」と呼び、炎の中に消えた。同じく市川の演じた『勇者ライディーン』のプリンス=シャーキン、『超電磁ロボ コン・バトラーV』の大将軍ガルーダ、『闘将ダイモス』のリヒテルにならぶ美形悪役とされる。名前の由来は「ユアハイネス（your highness）」から。

【皇帝ズ・ザンバジル】声 - 寺島幹夫、内海賢二（第27話のみ）

ボアザン星間帝国第124代皇帝。先代皇帝と腰元との間に生まれた妾腹の子であるため、周囲の冷たい視線を浴びて育ってきた。それ故に周囲への深い怨念と鬱屈した性格を持つに至り、先の皇帝が死去した時点で最も優位な皇位継承権を持つラ・ゴールを妬み、5人の腹心の軍人に命じて密かに工作し、そのうちの一人がロザリアの前で人工の角を取るラ・ゴールの姿を目撃、また人工の角を付ける手術を行った医師バルムらを拷問してその事実を訊き出した。こうしてラ・ゴールに角がないことを突き止め、戴冠式の際にそれを暴露、ラ・ゴールを失脚させて皇帝の座に就く。その後は晴れることのない怨念をぶつける形で、過激な軍事拡大路線を展開し、地球など他星侵略を進めた。ラ・ゴールを労奴に落としたものの、その息子ハイネルには角があったため、ザンバジルはその座を脅かされる可能性があった。そのためハイネルを地球征服軍司令官に任命し、あわよくば戦死してくれることを望む。ド・ズールやド・ベルガンはそのために遣わされた皇帝側の部下であり、機会をうかがって暗殺することすら想定の範囲内であった。黄金城に住み、労奴階級からの搾取によって豪華な生活を営む。ボアザン星には一定の確率で角のない者が生まれるため、それらを労奴としており、また角のない労奴同士の子供に角があっても闘奴や兵卒にしかなれない。帝国のさらなる繁栄のために労働力を求めて、他星を侵略していたようである。ボアザン帝国では、こうした差別に不満・憎悪をいだく労奴や、他星への侵略をよしとしない和平派が、ラ・ゴールに限らず多く存在していて、ボアザン貴族社会は揺らぎ始めていた。最後はボルテスのボアザン本星侵攻と時を同じくして起こった労奴の大反乱により、旧体制は一気に崩壊する。黄金城へと近付く革命の足音により皇帝の誇りも正気も失い、宝物を抱えつつ爆弾を振り回し狂乱する。何とか落ち着かせようとしたハイネルを見て、地球侵略の全責任を転嫁したため、あまりの浅ましい姿に憤慨したハイネルにより短剣を突き立てられ、その直後自らが手にしていた爆弾により爆死。それまで「叔父上」と呼び敬っていたハイネルは、その見苦しい狂態に「余はこんな蛆虫のために戦っていたのか」と呟いている。

出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

【守護神ゴードル】声 - 長浜忠夫

ボアザン星の守護神を象った神像だが、その正体は巨大ロボット。「国を愛する者が守護神ゴードルの燃えさかる炎に身を投ずるならば、その時、守護神ゴードルは国難を救う」という言い伝えがあり、最終回でその言い伝えを実行したハイネルは操縦席へと転送され、ゴードルの声を聞く。武器は手に携えた剣と口から吐く炎。さらにはボルテスを投げ飛ばすほどのパワーを兼ね備えている。ボルテスとの激しい鍔迫り合いの末に相討ちとなる。長浜はゴードルのコンピューターの声を演じたが、ノンクレジットであったため、それが公に判明したのは後のことだった。

2023.04.04

超電磁マシーン ボルテスV

1977年

http://moto-material.lsv.jp/

2023.04.04

【リー・カザリーン】声 - 小原乃梨子
ハイネルの側近の一人。貴族らしい物腰の美女。科学者として随行し、新兵器や獣士の素体開発を担当している。ハイネルの乳母がカザリーンの母であり、ハイネルの乳兄弟として幼い頃より共に育ち、ハイネルを愛している。司令官を解任されたハイネルを連れてボアザン星に帰還した後、これ以上の戦いは無意味とハイネルを説得する。しかし、貴族の誇りと責務を捨てきれず戦いに身を投じんとするハイネルを追った末、黄金城での決戦の混乱の中、逃走を試みる貴族に銃を向けられたハイネルを庇って撃たれ死亡する。設定上のフルネームはリー・カザリーン・ド・ファロア。未放映シナリオでは、角のないリー・マリーン・ド・ファロアという妹がいて、カザリーン出征後労奴に落とされ、後に地球に逃亡、健一と淡いロマンスを繰り広げる、という話もあった。角のモチーフは昆虫の触角（側頭部から二本角）。角に引っかけてベールを垂らしている。

【フィリピンでの評判】
本作品は世界各国で放送されたが、1978年に放送を開始したフィリピンでは特に大人気で、最高視聴率が58%を記録した。当時テレビアニメといえばアメリカ作品しかなかったフィリピンでは、子供たちにとって『ボルテスV』の登場は衝撃的な出来事で、『ボルテスV』の成功を契機に、フィリピンに次々と日本のロボットアニメが輸入されることになった。フィリピンでは、子供の人気とは裏腹に、大人たちの『ボルテスV』への反発が存在した。当時の放送の担当者には、本作品による子供への悪影響を心配した親や教師から「本作品の内容が暴力的であり、道徳的でない」としたものや「子供がボルテスVに夢中になるばかりにキャラクターグッズを欲しがったり、勉強をしなくなったりする」ことを心配する抗議の声が寄せられた。また、第二次世界大戦後のフィリピンでの反日感情からボルテスVの武器を侍の刀の象徴であるとか、旧日本軍の賛美や戦時中の行いを正当化したもの、軍人精神を称えるものと捉えたり、本作品を皮切りに日本企業が台頭してくることを警戒する声もあり、民間で抗議団体も結成された。最終話直前の1979年8月、時の大統領フェルディナンド・マルコスが放送禁止を宣言し、国営放送での『ボルテスV』は放送中止された。このフィリピンでの『ボルテスV』を巡る話題は、日本でもマスコミを通じて紹介された。まず『週刊読売』1979年2月4日号では、フィリピンでの『ボルテスV』人気を報じた。続いて、1979年8月29日付の『東京新聞』では、当時のマルコス大統領が暴力的として中止に乗り出したことを伝えた。『週刊アサヒ芸能』1979年10月4日号も放映中止事件を扱っている。いずれも俗悪な暴力番組のため放送中止になったという扱いだった。国営放送で本作品の残りの回が放映されたのは、エドゥサ革命でマルコス政権が倒れた直後の1986年であった。そのため「ボルテスVを放映させるために革命が起き、マルコス政権が倒れた。」というジョークが語られることがあるが、この放送再開時にはかつてのような熱狂的ブームも抗議活動もなかったという。一方、フィリピン人スタッフ制作でこの問題をテーマにした番組『NHKスペシャル・ドキュメンタリーアジア発』第1回「フィリピン『日本製アニメに何を見たか』－ボルテスファイブを知っていますか？－」（1991年9月30日放送）では、フィリピン人から見た打ち切り問題の原因が論じられている。政治的判断によりボルテスが打ち切られたとする意見に対し、番組内では、『ボルテスV』を配給していた企業が「政界のその筋にパイプを持っていなかったため、我が社だけが不公平な扱いを受けた。ビジネスにはよくある話である」と説明している。また、上述のように第二次世界大戦後のリアルな反日感情を持ち『ボルテスV』に反対していた大人の世代と、強い反日感情を持たず「ボルテスVが面白かったので見ていただけで、ボルテスVでさえあればどこの国の製品でも構わなかった」と考える子供の世代とのジェネレーションギャップなどといった、様々な観点が紹介されている。さらに時代が下り、1999年から『ボルテスV』の再放送が始まると、リバイバルブームになった。最高視聴率が40%を超え、日本語の主題歌「ボルテスVの歌」も大ヒットした。朝の時間帯に放送していたため、子供が学校になかなか行こうとしなかったという話もある。主題歌を歌った堀江美都子がフィリピンでライブを行った際は、国賓並みの待遇を受けたという。当時の『東京新聞』では、現地に駐在の記者が、主題歌の日本語歌詞を入手した現地の人に「英語に訳してくれ」といわれ、「Even if...」と訳していったというエピソードを掲載している。2006年、安倍晋三総理夫妻がフィリピンを訪問した際、昭恵夫人が訪問した施設において、現地の若者たちは本作品のエンディングテーマを歌って迎えた。2017年12月10日、『超電磁マシーン ボルテスV』の放送40周年を記念し、フィリピン・マニラにてキャラクターマラソン&ファンイベントを開催。5 kmのキャラクターランと堀江美都子による「ボルテスVの歌」ステージショーを実施した。2020年1月、実写によるリメイク版『Voltes V Legacy』の制作が発表された。これは2022年放送予定のテレビシリーズで、主役のボルテスチーム5人の役名は、剛健一がスティーブ・アームストロング、峰一平がマーク・ゴードン、剛大次郎がロバート・ビッグ・バート・アームストロング、剛日吉がリトル・ジョン・アームストロング、岡めぐみがジェィミー・ロビンソンに変更されている。2023年1月『Voltes V Legacy』はGMAネットワークが製作するテレビシリーズとして年内に放送されることが発表され、同時にトレイラー映像も公開された。
出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

話数	サブタイトル	脚本	絵コンテ	演出	作画監督
第1話	宇宙からの侵略者	田口章一 五武冬史	とみの喜幸	とみの喜幸	金山明博
第2話	苦闘への前進	田口章一	高橋資祐	横山裕一朗	金山明博
第3話	墓標が教えた作戦	辻真先	とみの喜幸	とみの喜幸	金山明博
第4話	魔のシャドウ必殺剣	五武冬史	寺田和男	寺田和男	佐々門信芳 金山明博
第5話	戦艦三笠が危機を呼ぶ	田口章一	高橋資祐	横山裕一朗	高橋資祐 金山明博
第6話	いななけ! 愛馬アイフル	桜井正明	とみの喜幸	とみの喜幸	金山明博
第7話	新隊員タッコちゃん	田口章一	樋口雅一	横山裕一朗	塩山紀生 金山明博
第8話	地底城の陰謀	五武冬史	寺田和男	寺田和男	金山明博
第9話	夢が招いた大ピンチ	桜井正明	とみの喜幸	とみの喜幸	佐々門信芳 金山明博
第10話	ボルテス合体不可能!	田口章一	高橋資祐	高橋資祐	高橋資祐 金山明博
第11話	よみがえるボルテスV!	田口章一	柳弘通	横山裕一朗	坂本三郎 金山明博
第12話	ボルテス起死回生	五武冬史	とみの喜幸	とみの喜幸	金山明博
第13話	謀略の父が地球を狙う	田口章一	寺田和男	寺田和男	塩山紀生 金山明博
第14話	父と子の罠	辻真先	柳弘通	横山裕一朗	金山明博
第15話	皇帝陛下のプレゼント	桜井正明	高橋資祐	山崎和男	高橋資祐 金山明博
第16話	ファルコン壊滅の危機	五武冬史	とみの喜幸	とみの喜幸	坂本三郎 金山明博
第17話	愛も涙もふりすてろ!!	五武冬史	寺田和男	寺田和男	佐々門信芳 金山明博
第18話	父よ! 地球は近い!!	田口章一	横山裕一朗	横山裕一朗	金山明博
第19話	父の胸の中で泣け!!	田口章一	とみの喜幸	山崎和男	塩山紀生 金山明博
第20話	血で書いた数字の謎	辻真先	高橋資祐	上原一夫	金山明博
第21話	策謀の秘密基地	五武冬史	寺田和男	寺田和男	坂本三郎 金山明博
第22話	裏切り者の計画	田口章一	横山裕一朗	横山裕一朗	佐々門信芳 金山明博
第23話	小犬よ明日へ歩め!	塚本裕美子	高橋資祐	山崎和男	高橋資祐 金山明博
第24話	敵・新将軍の挑戦状	田口章一	磯浜太郎	山崎和男	金山明博
第25話	自爆!! 超電磁ボール	五武冬史	寺田和男	寺田和男	塩山紀生 金山明博
第26話	謎の飛行メカとの合体	五武冬史	横山裕一朗	横山裕一朗	金山明博
第27話	謎の鷹メカの正体	田口章一	柳弘通	原田益次	佐々門信芳 金山明博
第28話	父 剛健太郎の秘密	五武冬史	寺田和男	寺田和男	金山明博
第29話	ボアザン星の勇士	五武冬史	横山裕一朗	横山裕一朗	金山明博
第30話	地球を賭けた一騎撃ち	桜井正明	山崎和男	山崎和男	金山明博
第31話	岡防衛長官空に散る!!	辻真先	磯浜太郎	あおいあきら 加瀬充子	佐々門信芳 金山明博
第32話	ジャングルの追跡	五武冬史	寺田和男	寺田和男	金山明博
第33話	魔の細菌攻撃	五武冬史	磯浜太郎	横山裕一朗	塩山紀生 金山明博
第34話	憎しみの炎が危機を呼ぶ	田口章一	寺田和男	寺田和男	金山明博
第35話	星の戦士への鎮魂曲	辻真先	磯浜太郎	四辻たかお	佐々門信芳 金山明博
第36話	地底城攻撃開始!!	田口章一	寺田和男	寺田和男	金山明博
第37話	さらば! 敵司令官ハイネル	田口章一	横山裕一朗	横山裕一朗	塩山紀生 金山明博
第38話	大宇宙へ出撃せよ!!	辻真先	磯浜太郎	四辻たかお	坂本三郎 金山明博
第39話	ボアザン星の大攻防戦	田口章一	山崎和男	山崎和男	金山明博
第40話	崩れゆく邪悪の塔!!	田口章一	寺田和男	寺田和男	金山明博

【スタッフ】

企画 -	碓氷夕焼（テレビ朝日）、飯島敬（東映）
原作 -	八手三郎（連載誌 -『テレビランド』、『てれびくん』、『小学館学習雑誌』）
キャラクターデザイン -	聖悠紀
メカニックデザイン -	デザインオフィス・メカマン（大河原邦男）、スタジオぬえ
アニメーションキャラクター -	佐々門信芳、金山明博
総監督 -	長浜忠夫
オープニング原画 -	金田伊功（クレジット表記無し）
メカニック担当設計 -	スタジオぬえ
設定助手 -	加瀬充子
作画製作 -	八幡正
製作協力 -	東北新社・日本サンライズ
制作 -	テレビ朝日、東映、東映エージエンシー
ナレーション -	槇大輔（本編）、曽我部和行（タイトルコール）、市川治（次回予告）

【スカールーク】
ボアザン軍の戦闘指揮艦。主にジャンギャルが前線指揮に使用している。デザインは巨大な髑髏状の主艦体上に西洋風城塞を模した艦橋が建つもので、そこから名前は骸骨（スカール）と城（ルーク）を合成して付けられている。獣士を搭載することも可能で、眼窩状の発進口から飛び出して来る。ワープ航行能力を持ち、ハイネルらも第1話で本艦によって地球へ赴任してきた。第37話においてベルガンが地底城から引き揚げる際に爆破されてしまう。

【獣士／鎧獣士】声 - 黒部鉄、飯塚昭三（殆ど）、たてかべ和也（獣士ボンザルス）
ボアザン軍の主力攻撃要員。「攻撃獣士」「戦闘獣士」とも呼ばれる。単なる機動攻撃兵器ではなくボアザン兵士の脳が移植されており自律した意思を持つ、言わば巨大なサイボーグ戦士。地球上の生物を素材としたものが多いが、ザルザやデストロイドのようにほぼロボットに近い外見を持つものも存在する。獣士となるのはボアザン兵士にとって大変栄誉なこととされているため、志願兵が選抜されて獣士となる（獣士になることで貴族に叙せられたケースもあるため、昇格人事という意味合いもあったと思われる）。鎧獣士はマキシンガル合金による装甲強化型。なお、鎧獣士となった後も劇中のテロップは「獣士〇〇」のままであった。
出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

超電磁マシーン ボルテスV

1977年

http://moto-material.lsv.jp/